

相手の立場に立つとは？

－共感に対する認識の分析－

林 智 子

要 旨 この研究の目的は、「共感」の認知面である「相手の立場に立つこと」に焦点をあて、介護学生が「自分をイメージする」方法をどのように認識しているのかを明らかにすることをであった。介護学生61名を対象に調査を行った結果、「相手の立場に立つこと」を「共感」の一つとして捉えている学生が多いことが明らかになった。また、「自分をイメージする思考方法」を「相手の立場に立つこと」だと捉えている学生が多くみられた。一方、それは「相手に近づこうとする方法」の一つではあるが、それだけでは「相手の立場に立った」というには不十分だと捉えている学生も少数ながらいることが明らかになった。

I. はじめに

援助関係において、援助者の被援助者に対する「共感」は重要だといわれている。介護を学ぶ学生も「共感」の重要性を認識し、「共感」や「相手の立場に立つ」という用語を介護実習などでよく使用する。また、介護者が利用者に対して、どのような介護を提供しようかと考える時、「もし自分が相手（利用者）の立場だったらどうだろうか」と「自分をイメージする」方法で考えることは多くみられる。さて、それでは介護者が「もし自分が利用者の立場だったらどうだろうか」と「自分をイメージする」方法で考えることは、「利用者の立場に立つこと」なのだろうか。

心理学分野では、「相手の立場に立つこと」を視点取得（perspective taking）と呼んでいる。Hoffman, M.L. (2001) は、視点取得を「自分を他人の立場に置いて、その相手がどう感じているかをイメージすることである」と定義している。その定義から考えると、「自分をイメージすること」は「他人の立場に立った自分がどう感じているかをイメージすること」であり、立場を自分の側に移動し自分の感じ方を問うているに過ぎない。このように考えると、「自分をイメージする」方法は「相手の立場に立つこと」ではないことになる。しかし、前述のように定義しているHoffman (2001) 自身も、「自分をイメージする」方法を視点取得のひとつの方法であると考えており、視点取得が具体的にどの

ような思考過程を言うのかについては心理学分野でも一致した見解がない。

また、Stotland, E. (1969) の「自分をイメージする（自分自身がどう感じているかを想像）」と「他人をイメージする（他人がどう感じているかを想像）」の2つの教示により「視点取得」を操作する方法は、心理学分野では広く使用されている。この教示を使用した実験が示している結果は、「自分をイメージする」教示の方が「他人をイメージする」教示よりも「共感」が喚起されることを見出している。このことから二つの教示の違いを考えてみると、「自分をイメージする」ことは人間の思考の中で比較的容易であるが、「他人をイメージする」ことは困難であるため、「自分をイメージする」教示の方がその状況をイメージでき、「共感」に至るのではないだろうか。それから考えると、「自分をイメージする」ことは、本来の意味での視点取得ではないが、「相手をイメージする」という困難を伴う視点取得の過程において、「自分をイメージする」ことが何らかの役割を果たしているのではないだろうか。

そこで、「自分をイメージする」方法が「相手の立場に立つこと」にどのように関連しているかを検討していきたい。ここでは「共感」の認知面である「相手の立場に立つこと」に焦点をあて、介護学生が「自分をイメージする」方法をどのように認識しているかを明らかにすることを目的とする。

II. 方法

1. 調査対象

〇短期大学の介護を専攻する学生61名。

2. 調査時期

2003年12月。

3. 調査の内容

- (1)「共感」の意味の自由記述：「共感」とはどのような意味だと思うかを問い回答を求めた。
- (2)「共感」の程度の判断と理由の記述：提示された介護場面（表1）を読み、この学生がある利用者から「もう、やることもないし、死ぬだけで、食べる気にならん。あんただったら食べるかね」と問われた場面で、学生が「自分だったら、実際に食べたくなければ、食べないだろうな」と思い、「自分だったら食べないだろうと思います」と答えたとしたら、この対応が「共感」している対応になっていると思うか。その「共感」の程度を「とても共感している」から「まったく共感していない」の4段階で回答を求めた。また、その判断理由を自由記述として回答を求めた。
- (3)「相手の立場」に立っているか否か：(2)の「自分だったら、実際に食べたくなければ、食べないだろうな」という学生の考えは「相手の立場に立って考えることだと思う」か「相手の立場に立って考えることだとは思わない」かの二者択一の回答とその理由の記述の回答を求めた。

4. 分析方法

量的データは単純集計を行なった。

質的データ（自由記述）は、内容分析の方法に倣い、似ている内容を集めて類型化しカテゴリーを抽出した。

5. 手続き及び倫理的配慮

教室で質問紙を配布し、プライバシーの保護や自由意思での参加等を説明した。同意を得られた者のみ、後日指定の回収箱で回収する留置法で行なった。96部を配布したうち61部を回収し（63.5%）、回答の不備などをチェックしたのち61部について分析を行なった。

III. 結果

1. 介護学生が認識している「共感」の意味

介護学生が「共感」の意味をどのように認識しているかを自由記述したものから、「共感」の意味を抜き出し、カテゴリーに分類した（表2）。

それらは7つのカテゴリーに分類された。1つ目のカテゴリーは、「相手の気持ちになって考える」「相手の立場に立ってその人の気持ちをそのまま受けとめる」などのデータから、「相手の立場に立って考えること」と命名した。2つ目のカテゴリーは、「一緒の気持ち」「自然と相手と同じような気持ちになる」などのデータから、「同じ気持ちになる」と命名した。3つ目のカテゴリーは、「相手の言っていることを理解する」「相手の気持ちが分かる」などのデータから「相手の気持ちを理解すること」と命名した。4つ目のカテゴリーは、「傾聴」「気持ちに耳を傾ける」などのデータから、「傾聴すること」と命名した。5つ目のカテゴリーは、「同じ気持ちや分かることを表情や言葉で表わす」「自分が同じ気持ちだということを相手に伝える」などのデータから、「理解を相手に伝える」と命名した。6つ目のカテゴリーは、「お互いに同意すること」「相手の言っている話に同意すること」などのデータから、「同意すること」と命名した。7つ目のカテゴリーは「共に感じること」「相手の気持ちを共に感じること」などのデータから、「共に感じること」と命名した。

2. 介護学生の対応の「共感」の程度

表1で示した場面の「自分だったら食べないだろうと思います」という学生の対応の「共感」の程度を4段階で回答を求めた。

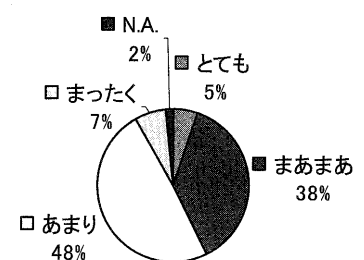


図1 「共感」の程度

4段階への回答の比率を図1に示した。[とても共感している]は3名（4.8%）、[まあまあ共感している]は23名（37.1%）、[あまり共感していない]は30名（48.4%）、[まったく共感していない]は4名（6.5%）であった。[あまり共感していない]が半数近くを占めた。また、「共感」の程度判断の理由を表3に示した。それを見ると、「共感している」対応だとする理由は、『利用者の言っていることと合っているから』『利用者の気持ちを理解しようとしているから』などであった。反対に「共感していない」とする理由は『自分だったらという利

用者はやる気をなくす』『自分の意見であって利用者の立場を考えて言っていない』などであった。肯定する立場では、利用者の気持ちが理解できているかではなく、理解しようとしていることや表面的な会話の内容の一致を評価していた。否定する立場では、自分に置き換えて考えることを否定的に評価していた。

3. 「相手の立場に立つこと」か否か

『自分だったら、実際に食べたくなければ、

食べないだろうな』という考えは相手の立場に立っているか」という質問に対する回答を「相手の立場に立って考えることだと思う」と「相手の立場に立って考え

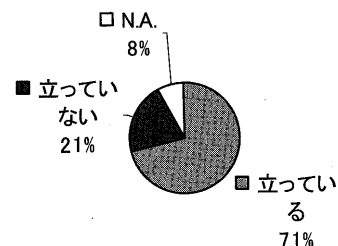


図2 相手の立場か否か

表1 提示された場面

Yさんは介護学生です。Yさんは特別養護老人ホームの実習で次のような体験をしました。昼食の時間となり、食事介助を行なうことになりました。近くにいた80歳代の男性の利用者が、食事に手をつけていなかったため、Yさんが「なぜ食べないのですか」と尋ねると、「もうやる事もないし、死ぬだけで、食べる気にならん。あんただったら食べるかね」と言われました。学生Yさんは「自分だったら、実際に食べたくなければ食べないだろうな」と思い、「自分だったら食べないだろうと思います」と答えました。

表2 「共感」の意味の認識

カテゴリー	データ
1. 相手の立場に立って考えること	①相手の気持ちになって考える, ②相手の気持ちになる, ③その人の立場に立ってその人の気持ちをそのまま受け入れる, ④相手の立場や気持ちになって考えること, ⑤自分だったらどう感じるのだろうかということではなく相手の立場に立って感じる, ⑥相手と同じ立場になって話したり考えること
2. 同じ気持ちになること	①一緒に気持ち, ②自然と相手と同じような気持ちになる, ③同じ感情・思いをもつこと, ④相手が感じたことと同じように思ったり感じたりすること, ⑤考えや思いが通じ合うこと, ⑥同じ思いを抱こうとすること
3. 相手の気持ちを理解すること	①相手の言っていることを理解する, ②相手の気持ちがわかる, ③相手の気持ちを考える, ④相手の気持ちを受けとめる, ⑤相手の気持ちに自分の気持ちを寄せること, ⑥相手の会話の意味を捉える, ⑦相手と同じ気持ちになり相手の気持ちを理解すること, ⑧相手の気持ちに寄り添う, ⑨相手の気持ちを理解する
4. 傾聴すること	①傾聴, ②気持ちに耳を傾ける, ③相手の話を気持ちを入れて聞く
5. 理解したことを相手に伝える	①同じ気持ちや分かることを表情や言葉で表わす, ②自分が同じ気持ちだということを相手に伝える, ③相手の言うことを否定しない, ④一緒にうなづくこと, ⑤批判しない, ⑥評価する態度でない, ⑦相手の気持ちを受けとめ否定しないこと
6. 同意すること	①お互いに同意すること, ②同意する, ③相手の言っている話に同意すること, ④賛成・同意
7. 共に感じる	①共に感じる, ②相手の気持ちを共に感じる, ③感動を共に分かち合う, ④共に同じことを感じる

表3 「共感」の程度の判断理由

「共感」の程度	データ
4. とても共感している	①言葉としては同じ事を言っているが、それではどんどん暗い気持ちになってしまうので、利用者さんのやる気が出る声掛けをした方が良かったから。
3. まあまあ共感している	①一緒に気持ちだよということを言っている、②利用者の言っていることと合っているから、③自分の気持ちをはっきり言っていて相手の思いに立っているから、④なぜ利用者さんが食べたくないのかその理由を聞いていない、⑤無理に食事を押し付けていない、⑥利用者さんは死ぬために食べないから、⑦何で自分だったら食べないのかをもっとその理由も答えればとても共感していると思う、⑧利用者の気持ちを理解しようとはしていると思う、⑨私もそう思ったから、⑩相手の心理状態を考えての発言と思えるので、⑪ただ食べる気がないから食べないのとやる気も何もないからいらないは少し違うがまあまあ共感していると思ったから、⑫利用者さんの気持ちを理解し自分に置き換えて考えることができてから、⑬少しは同じような事を思いながらも利用者さんには食べてもらわないと…って思っている所もあるから、⑭もしこの利用者さんが「自分は明日死ぬんだ」と思い込んでいたら「食べてもしょうがない」という気持ちに共感してしまう、⑮話的には共感していることになると思うが利用者さんのためにはならないのではないかと、
2. あまり共感していない	①利用者さんの健康面を考えていない、②ご飯を勧める声かけが必要だと思う、③本当に食べたくないのか分からないしその人にとって良くない傾向にあるので共感しているとはいえない、④これは共感ではないと思ったから、⑤もしこれでご飯を食べてもらえなくなったら意味がない、⑥共感しているのかもしれないけど男性にとってよい返答の仕方だとは思わないから、⑦利用者の意見に自分の考えを伝えているが「自分だったら食べない」というのは利用者の食べる気がしない心をもっと食べる気にしない答えだと思うから、⑧この答え方利用者さんの気持ちを共感した答え方ではないと思う、⑨何か死ぬ事を強調したような答え方に聞こえる、⑩なぜ利用者さんがやる気がないと言ったか学生はちゃんと考えているのだろうかと思ったから、⑪相手の立場に立って考えていると思う。けど、食べないという逆逆利用者さんが余計に食べにくくなると思う、⑫利用者さんは食べる気を起こして欲しいのではないかと思ったから。「自分だったら…」と言われたらやる気を失くす、⑬少しは共感していると思うけどやはり介護を習っている人としてももう少し会話が欲しい、⑭その理由を利用者に言っていないし、利用者の気持ちがうつのまま終わっているから、⑮もしかしたら励まして欲しいのかもしれないから「食べたくない」というだけでなく、もっと頑張れるような声掛けをすればいいと思った、⑯行動は同じでも気持ちは違うと思ったから。利用者にはそう思うまでに何かあったと思うからそれを知った方がいいと思う、⑰自分も食べたくないで共感しているようだけど、利用者に「食べなくてもいい」という印象を与えることになってしまっているような気がするから、⑱利用者さんは否定して欲しいのだと思うし、心配して欲しいのだと思うから。自分だったら食べないと言われたらとても悲しくなると思う、⑲食べない理由ももっと他にあると思う。食べる気持ちにならないのは精神的な問題が大きいと思う、⑳食べたくないことに共感しているように思うが、死への共感がないように思うから。ますます食べようとしなくなると思う、㉑自分の意見を述べただけで、あまり共感しているとは言えないが否定している訳でなく同じ思いがあるということから、全くしていない訳ではないと思う、㉒利用者の立場に立って考えている訳じゃなく、自分に置き換えているだけだから、㉓利用者さんの気持ちを全て理解してでの発言ではないと思うから、㉔自分の意見であって利用者の立場を考えて言っていることじゃないと思うから、㉕返事の返し方が自分だったらという言葉に抵抗があり、共感されていないと思います、㉖食べてもらおうと声掛けしたのに「自分だったら食べないだろう」と答えたら利用者に食べる意欲が無くなってしまふから。矛盾してしまうから、死んでもいいみたいだから共感あまりできていないと思う、
1. 全く共感していない	①共感はその人の言葉をありのまま受け止めることであり、学生の言葉は利用者さんの感情や状態をさらに悪化させている。「自分は食べない」という前に利用者さんの言葉を分かってあげることが大切だと思う、②利用者さんが言ったことを否定していないから、③利用者さんが本当に食事をしないと困るから、「食べる食べない」という事がこの利用者の心の根本ではない。「やる事がない」ということが一番重要なことなのでこの点に心を沿わせてあげることが本当の共感、④学生の「自分だったら…」という表現は利用者さんの意見を無視した発言になっていると思う。共感と言うのは「そうだね」「辛いよね」と利用者さんの気持ちを優先することだと思う、

ることだとは思わない」の二者択一で求めた。それぞれに回答した割合を図2に示した。「相手の立場に立って考えることだと思う」は44名(71.0%)であった。一方、「相手の立場に立って考えることだとは思わない」は13名(21.0%)であった。「相手の立場に立っている」が7割と多数を占めた。また、それぞれの理由を表4に示した。まず、「相手の立場に立って考えることだと思う」理由は『相手がどのように考えているのか知ろうとしているから』『人の気持ちは分からないが、分からない気持ちを自分に当てはめるのは相手の立場に立っていると思う』『まず自分だったらと考えることは重要だと思う』などであった。次に、「相手の立場に立

て考えることだとは思わない」理由は『これは自分の立場だから』『自分の事だから』『相手と自分は別人だから』などであった。しかし、中には「理由は分からない」「何となく」や理由が書かれていないものもあり、「相手の立場に立つ」ことをどのように考えれば良いのかが明確でない学生も少なくなかった。

IV. 考察

1. 介護学生が認識している「共感」の意味

7つのカテゴリーをみると、「1. 相手の立場に立って考えること」「2. 同じ気持ちになること」「3. 相手の気持ちを理解すること」「4. 傾聴すること」「5. 理解したことを相手

表4 「相手の立場に立っている」か否かの理由

	データ
2. 相手の立場に立っているとと思う	①相手の気持ちになっているけど、それじゃ介護福祉士じゃなくても思うし、その利用者の先のことを考えなければいけない、②相手といっても全く分かるわけではないから、共感といえるのか分からないが、③よくわかりません、④「自分だったら…」と考えているのは、相手がどのように考えているのかを知ろうとしているから、⑤利用者があんなだったら食べるかと聞いてきたことに対して自分だったらと答えているから、⑥人の気持ちなんてその人にしか分からないことであると思う、⑦分からない気持ちを自分に当てはめるのは、相手の立場に立って考えることだと思う、⑧「自分だったら…」と考えている時点で相手のことを思っていると思う。けど1に近い2っていう感じ、⑨相手の立場を理解しようとしている。しかし、相手の立場を完全には理解することはできないと思う、⑩自分を相手に置き換えているから相手の立場に立っていると思うが、学生はただ単に食べる、食べないという選択をしている。その相手は食べたくない理由があって食べないわけだから学生は相手の立場に立っていない、⑪その人に移入しているから、⑫自分だったら…と相手の立場や状況になり考えているから、⑬理由は特に分からないけど、そう思う、⑭自分に置き換えているから、⑮相手の状況を考えているから、⑯自分を同じ状況に置いているので、⑰相手は自分とは違う立場だけど、「自分だったら」と考えているから、⑱あなただったらと聞かれているのでいいと思う、⑲自分がもし相手の立場だったらという考え方なので、相手の立場に立って考えることであると思う、⑳「自分だったら…」といっているのだから、相手の立場に立って考えていないように思う。けれど、質問に対し、自分なりに考えているので、相手の立場に立っているのかなと思う、㉑相手を自分と置き換えて考えているから。たとえ、意見が違っても立場には立っていると思う、㉒相手の立場に立って考えることは大事だから、㉓自分のこと、相手の立場、2つのことを考え、利用者の質問に対しての答えを出すことはいいことだと思う、㉔自分の考えも重要だと思うから、㉕まずは自分だったらどうかということを考えることは必要だと思うから、㉖自分がやられて嫌なことは、人にしちゃいけません、
1. 相手の立場に立ってとは思わない	①これは自分の立場だから、利用者さんはなぜ食べたくないのか、自分はどのように思ったかを考えていないから、②何となく、③「自分だったら」と書いてあるように、自分の事だと思ったから、④本当にその人のことをよく考えてその人にとって良いと思うことが必要、⑤自分と相手は別人なので、相手の立場ではないのかも、⑥自分が相手と全く同じ条件、環境にたっているわけではないので、自分と相手と置き換えても、相手に対する説得力になっていないと思う、⑦自分に置き換えているだけだから、⑧利用者の話を聞いた訳ではないので、想像で相手の立場に立とうとしているから、⑨自分の気持ちであって、利用者さんの食べたくない理由とは違うと思うから、⑩自分だったら健康で一食くらい抜いても平気かもしれないが、利用者の方は別だとも思う、

に伝える」では、相手の「気持ち」に焦点があたっており、「共感」が相手の気持ちを取り扱うものであるという特徴をとらえていると推測される。また、上記の5つのカテゴリーは「共感」プロセスの要素と一致するものである。このことから、多くの学生は「共感」の意味を正確に認識していると推察することができる。また、学生は今回主題として取り上げた「相手の立場に立つこと」を「共感」としてとらえていることが明らかとなった。

しかし、「6. 同意すること」というカテゴリーをみると、「相手の言っていることに同意する」「賛成・同意」などの意味が書かれており、「共感」の本来の意味とは異なる意味でとらえている学生がいることが分かった。また、「7. 共に感じること」は「共感」という用語そのままを意味としてとらえていると推測され、「共感」の意味が正確に認識されていないことが推察される。

2. 介護学生の対応の「共感」の程度

「自分だったら食べないだろうと思います」という対応が「共感」している対応かどうかについては、「あまり共感していない」対応だとする回答が半数近くを占め、「まったく共感していない」を合わせると55%の学生が「共感していない」と考えていることが明らかになった。しかし、「とても共感している」「まあまあ共感している」を合わせると42%の学生が「共感している」と考えており、大きな差とはなっていない。この結果から考えると、「自分だったら食べないだろうと思います」という対応は、「共感」の明確な決め手に欠ける対応であると考えられる。

学生の回答の理由から、それがどのようなことなのかを推測してみたい。「共感している」対応だとする理由には、『利用者の言っていることと合っているから』『利用者の気持ちを理解しようとしているから』などである。『言っていることと合っている』は「共感」を「相手の言っていることに合わせること」だと解釈していることが推測され、「共感」の認識が十分であるとはいえない。また、『気持ちを理解しようとしている』は「理解しようとするきもち」を「共感」だと解釈していることが推測される。「理解しよう」としていても実際に理解できていなければ

「共感」であるとはいえず、「理解しようとする」レベルで「共感」だと考えることは、援助者の自己満足で終わる傾向にあり、被援助者にとっては迷惑な援助となる危険もある。したがって、これらの理由から「共感している」と判断していることは、正確に「共感」を理解した上での判断であるとはいえないだろう。

逆に「共感していない」対応だとする理由には『自分だったらという利用者はやる気をなくす』『自分の意見であって利用者の立場を考えて言っていない』などである。この2つの意見は、「自分だったら」と自分に置き換えて考える方法を否定的にとらえており、そのためにこの対応を「共感していない」対応だと考えていることが明らかになった。

以上のことから、「自分だったら食べないだろうと思います」という対応の「共感の程度」を問う中で、「自分だったら」と自分に置き換えて考えることを「相手の気持ちを理解しようとしている」と肯定的に考える場合は、「共感している対応だ」ととらえる傾向にあり、「自分の意見であって相手の立場を考えていない」と否定的に考える場合は、「共感していない対応だ」ととらえる傾向にあることが分かった。つまり、「自分だったら」と自分に置き換えて考える方法を肯定的にとらえているか否かが、「共感しているか否か」の判断基準になっていることが明らかになった。

3. 「相手の立場に立つこと」か否か

『自分だったら、実際に食べたくなければ、食べないだろうな』という考えは相手の立場に立っているか」という質問に対して、「相手の立場に立って考えることだと思う」とする回答が7割と多数を占めた。このことから、介護学生の多くが、「自分だったら」と考えることを「相手の立場に立って考えること」だと考えていることが明らかになった。

回答の理由をみて検討してみたい。「相手の立場に立って考えることだと思う」の理由をみると、『相手がどのように考えているのか知ろうとしているから』であり、これは「相手の気持ちを知ろうとしていること」に意味を見出している。また、『人の気持ちは分からないが、分からない気持ちを自分に当てはめているのは相手の立場に立っていると思う』であり、これ

は「分からない相手の気持ちを自分に当てはめて考えること」に意味を見出している。ここでは、「相手の立場に立つ」ことの意味を「相手の気持ちを知らうとすること」にあり、それを推測するのに「自分に当てはめる」ことに意味があるととらえていることが推測できる。

また、「相手の立場に立って考えることだと思わない」の理由をみると、『これは自分の立場だから』『自分のことだから』『相手と自分は別人だから』であり、「相手の立場に立って考える」ことは「相手がどう感じているかを考えることである」から、「自分が感じていることを考えること」は「相手の立場に立つことではない」ととらえていることが推測できる。

つまり、肯定する立場では全面的に相手の立場に立っているというよりは、相手の立場に近づこうとしている点に着目して肯定しており、否定する立場は全面的に相手の立場に立っていないことから否定していることが見出された。このことから、「相手の立場に立つこと」における「自分だったら」と自分をイメージする方法は、全面的に相手の立場に立っているのではないが、相手の立場に近づこうとする方法の一つとして位置づけられるだろう。よって、「自分だったら」と自分をイメージする方法だけで「相手の立場に立った」というには不十分であり、その方法に別の思考方法を加えることで「相手の立場に立つ」思考方法とすることができるのではないだろうか。

Hoffman,M.L. (2001) はStotland,E.の実験から、3つの視点取得のタイプがあるとし、「自分をイメージする方法」を自己注視的視点取得、「他者をイメージする方法」を他者注視的視点取得とし、もうひとつをその混合型であるとしている。しかし、これらにどのような違いがあるのかなど、その中身については未だ明らかになっていない。今後、「自分をイメージする思考方法」と「他人をイメージする思考方法」の違いを検討し、「相手の立場に立つこと」の本質について明らかにしていくことが必要である。

V. 結論

介護学生の認識の特徴として、以下の3点が明らかになった。

1. 「相手の立場に立つ」は「共感」の意味の

ひとつとしてとらえられている学生が多い。

2. 「自分をイメージする思考方法」を肯定的に捕らえているか否かが、「共感しているか否か」の判断基準としている学生が多い。

3. 「自分をイメージする思考方法」を「相手の立場に立つこと」だと認識している学生が多くみられた。一方、「自分をイメージする思考方法」は「相手に近づこうとする方法」の一つではあるが、それだけでは「相手の立場に立った」というには不十分であると捉えている学生も少数いる。

本研究は、岡崎女子短期大学課題研究の助成を受けて行っている研究の一部をまとめたものである。なお、この一部は日本看護学教育学会第14回学術集会において発表した。

【文 献】

- Davis,M.H. (菊池章夫訳) : 共感の社会心理学, 川島書店,1999.
- Hoffman,M.L. (菊池章夫・二宮克美訳) : 共感と道徳性の発達心理学, 川島書店, pp.60-66, 2001.
- 井上晴豪: 患者の立場とは何か? 患者の立場理解トレーニング, ナースデータ, 25(1), pp.58-64, 2004.
- 見藤隆子: 「患者の立場に立つこと」への思索, 日本看護科学学会誌, 10(3), pp.2-3, 1990.
- 光元和憲: 内省心理療法入門, 山王出版, 2002.
- 宮崎清孝・上野直樹: 視点 (認知科学選書1), 東京大学出版会, 1996.
- Stotland,E. : Exploratory investigations of empathy. In L.Berkowitz (Ed.) , *Advances in experimental social psychology* (Vol.4,pp.271-314) . New York : Academic Press, 1969.
- 杉村伸一郎・竹内謙彰・今川峰子: 他者視点取得課題の要因についての分析的研究, 教育心理学研究, 40, pp.340-349, 1992.
- 富田富士也: コミュニケーションワークのこころ I, 東山書房, 1999.